

# 「生き延びてきた」戦争の記憶を継承する

——「生のあやうさ」に根ざす平和教育の再構築に向けて ——

吉田直子

研究室紀要 第42号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2016年7月

# 「生き延びてきた」戦争の記憶を継承する

——「生のあやうさ」に根ざす平和教育の再構築に向けて——

吉 田 直 子

## 1. 問題の所在

長崎の原爆で亡くなったはずの息子の亡霊と、その母とのやりとりを描いた映画で息子役を演じた若手俳優は、映画制作の過程を追ったドキュメンタリー番組の中で『戦争はいけないものです。こんなの二度と起こしてはならない悲劇なんです』って言われたところで『待って』と。〔中略〕なんかそこから「知ろう、知っていこう」っていう意欲を削がれちゃったっていうか。〔中略〕現実のものとして見えなくなっちゃった瞬間だった」と過去を振り返り、自らを「(戦争に) 入り込むことを遮断された世代」と位置づけていたり。また、沖縄で中高生向けの平和教育プログラムの作成に関わる大学生たちは、戦争はいけないことだと思っているけれど、悲惨な話ばかり聞かされるのが嫌で、それ以上の関心を持つことがなかったし、「戦争は二度としてはいけないと思います」という定型文を書くことが平和教育だと思っていた、と述べている<sup>2)</sup>。平和教育のマンネリ化が指摘されて久しいが<sup>3)</sup>、これらの発言にもその内実が如実に反映されているとみていだろう。悲惨な話ばかり聞かされること。自分の頭で考える余地も与えられないまま「戦争はいけない」という応答を求められること。そのため戦争にまつわる問題系についてリアリティを持って考えられず、関心を持つてなくなってしまったこと。彼らの声から透けてみえるのは、戦争や平和の問題に関して思考停止——「戦争反対」と唱えることを当然とみなすという意味での思考停止と、自分には関係ないという意味での思考停止との両方を含む——を招く教え込み型の平和教育への疑問である。

竹内 (2011) は、平和教育の学習者には3つの乖離が生じているという<sup>4)</sup>。「過去の戦争と今日の戦争の乖離」、「遠くの暴力 (戦争・飢餓・抑圧など) と身近な暴力との乖離」、「平和創造の理念(平和憲法) と現実の乖離」である。このうち最初の二つは、時

間的・地理的に距離のある暴力に対して、学習者がリアリティを持たずにいることから生じる乖離である (三つ目は法解釈の問題であるため、本稿では扱わない)。もっとも竹内は、過去の戦争について、単なる時間的な遠さだけを理由に学習者がリアリティを持たずにいる、と考えているわけではない点に留意する必要がある。竹内が強調するのは、むしろ学習者が抱く戦争イメージの「リアル」さのズレである。ハリウッド映画かテレビゲームかと思紛う映像を通して報じられる今日の戦争は、実は「リアル」なものではない。しかしそこにリアリティを実感する現代の学習者にとって、「リアル」そのものである過去の戦争の写真や映像は、逆にリアリティを実感できないものとなっている、と竹内は指摘する。本来「リアル」であったものにリアリティを感じず、「リアル」ではないものにリアリティを感じるという意味において、学習者には過去の戦争と今日の戦争との間に乖離が生じているのである。

もちろん平和教育に携わる人々は、戦後生まれの学習者に対していかに戦争のリアリティを持たせるか、という課題に長らく取り組んできた。そこで多用されたのが、戦場の悲惨な場面を切り取った写真や映像であり、凄惨な描写が続く語りや物語であった。つまり従来の平和教育では、当時の人々がいかに死んだのか、という「死」の側面を強調することで戦争のリアリティを喚起させた上で、「こんな悲惨な戦争は二度と繰り返してはいけない」と学習者に納得させる方法が主流であったといえる。そのやり方は、戦争の傷痕が社会のそこかしこで確認できた時代にはまだ有効だったのかもしれない。しかし今となってはもはや通用しなくなっている。「悲惨な話ばかり聞かされるのが嫌」との言葉に象徴されるように、戦争や平和教育に対する嫌悪感と、自らの思考と感覚の遮断を強めた学習者にとって、戦争はますますリアリティのないものになってしまったからである。

では戦争のリアリティはいかにして担保することが可能なのだろうか。ここで確認したいのは、琉球大学の「学生平和ガイドの会」<sup>5)</sup>の初代メンバーで、現在は同大学の教員として平和教育やへき地での学校教育の研究にたずさわる山口剛史の次の発言である（下線は筆者）。

被害者の痛みをきちっと受け止めるリアリティを追求して積み上げておくことって大事ななあというのが僕の考えですね。なんかそこが、「被害者、被害者」と言いながら、「被害ばかり」と言いながら、何も分かっていない、みたいな。悲惨な姿だけが見せられて、そこに生きていた人の痛みとか葛藤そのものとかっていうことに気持ち及ばないと「もう殺された話はいいよ」ってなってしまう。<sup>6)</sup>

「生きていた人の痛みや葛藤」を感受すること、すなわち「死」そのものではなく、生き延びてきた人の「生」のリアルに触れることを通して、戦争における生と死の両方へ接近しようとする山口の指摘は、この問題を考える上で重要な示唆を含んでいる。そこで本稿では、「いかに死んだのか」ではなく「いかに生き延びたのか」に焦点化する戦争の記憶の継承可能性と平和教育への効果について検討を試みる<sup>7)</sup>。具体的には、事例として沖縄戦、とりわけひめゆり学徒隊の記憶の継承をめぐる諸課題を、理念的なよりどころとしてJ.バトラーの「生のあやうさ」という概念を手がかりに考察を進めることとする。

## 2. 「死」の記憶／「生」の記憶

太平洋戦争末期、凄惨な地上戦が展開された沖縄には、多くの戦跡と住民の証言を含む膨大な数の戦時記録が残されている。特にひめゆり学徒隊については、戦後の早い時期から関連書籍が発表され、学

徒を主人公とした映画も繰り返し制作されてきた。本節では、戦後の「ひめゆり」の表象のあり方を事例に、戦争の記憶の継承において「死」および「生」を強調することの功罪を検討する。

### 2.1. 「死」の記憶を強調することの功罪 ——「ひめゆり」の表象をめぐる

1945年3月23日に始まった沖縄戦では、県下にあった21すべての中等学校で生徒たちが動員され、そのうち引率の教員を含む2000人余が命を落とした。このとき沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校から動員された15歳から19歳までの生徒222人と引率の教員18人がいわゆる「ひめゆり学徒隊」である。ひめゆり学徒隊は、3月23日より沖縄陸軍病院で看護活動を始め、5月25日には軍の撤退命令により本島南部へ移動したが、6月18日夜に突然の解散命令を受けたことで、すでに米軍に包囲された戦場に文字通り放り出された。北部への逃げ道を絶たれ、島南端の海岸に追い詰められた学徒と教員の中には、米軍の攻撃や自決により命を落とした者も多く、動員から解散命令までの犠牲者が19人（うち生徒15人）であったのに対し、解散命令後には100人以上の生徒が亡くなった。解散命令から5日後の6月23日に沖縄戦の組織的戦闘は終結したものの、ひめゆり学徒隊の犠牲者は最終的に生徒123名、教員13名に上った。

戦後、「ひめゆり」は沖縄戦を語る上で欠くことのできないアイコンとなった。夢と希望に満ち溢れた「乙女」たちが、無謀な戦争に巻き込まれ、傷を負った日本兵の看護に誠心誠意尽くすも、最後は米軍に追いつめられ、その若い命を散らした、という悲劇の物語は、とりわけ商業映画というメディアの影響力を背景に日本本土に広く流布していった。事実、ひめゆり学徒隊をとりあげた映画として、これまでに商業映画が4本とドキュメンタリー映画が1本制作されている。

制作年	タイトル	監督	脚本
1953年	「ひめゆりの塔」	今井正	水木洋子
1968年	「あゝひめゆりの塔」	舛田利雄	八木保太郎、若井基成、石森史郎
1982年	「ひめゆりの塔」	今井正	水木洋子 ※1953年版のリメイク
1995年	「ひめゆりの塔」	神山征二郎	神山征二郎、加藤伸代
2006年	「ひめゆり」	柴田昌平	柴田昌平 ※ドキュメンタリー

これらの映画の網羅的な比較分析は、仲程(2003)や福間(2005)の優れた論考に譲ることとして、本項では、1953年版のリメイクである1982年版と、商業映画とは性質の異なる2006年版を除く3作品、すなわち1953年版、1968年版、1995年版をとりあげる。この3作品における「ひめゆり」の表象の変遷を追うことで、それがどのようなものとして人口に膾炙していったのかを振り返ることができるだろう。

1953年版の監督である今井正は、この作品で「日本の戦争反対を企ててもおりませんし」としながらも、「真実を描いてゆけばそこに平和を守るという問題も描かれるだろうし、できるだけ真実を描いて、そして観る人がそれぞれそこから感じる」ことを重視したと述べている。その言葉どおり、感傷的な場面は少なく、血や肉が飛び交うシーンこそないが、リアルな描写に徹している。米兵の呼びかけに投降しようとした生徒の背中を撃つ軍医の姿や、沖縄の人々を差別する日本兵の言動など、軍国・帝国主義への批判的な視点が織り込まれているのも特徴的である。最後は、海岸で生徒と教師が次々と撃たれるシーンで終わる。当時の宣伝ポスターには「純潔の身を祖国に殉じたひめゆり部隊二百余名の霊に捧ぐ！」とあるが、映画自体は戦争の非情さが際立つ内容で、殉国美談という雰囲気は感じられない。

1968年版の主演は、当時青春スターとして絶大な人気を誇った吉永小百合と浜田光夫である。映画では“健気で可哀想な乙女たち”の姿が生徒役の吉永を中心に描かれ、吉永と浜田の淡い恋心を感じさせるやりとりが含まれるなど、全体的に感傷的なシーンが多く、事実と異なる描写も少なくない上に、当時の社会体制への批判的視点はほとんど確認できない。兵士のちぎれた手足が映るのも前作にはない特徴である<sup>9)</sup>。最後は、友人らを失った主人公と下級生が崖の上に立ち、手榴弾を爆発させて海に消えるシーンで終わる。特筆すべきは、二人の自決シーンの後、以下の文言がスクリーンに現れる点であろう。ここではっきりと「殉国」という文言が使われているからである。

沖縄戦で散った 殉国学徒の数は 師範中学女  
学校あわせて一五〇三名 教え子を引率して  
仆れた教師九二名 このように若い学徒の 犠  
牲者をだした戦争は 世界史上どこにも その  
例をみないという<sup>9)</sup>

1995年の作品は、53年版の原作にもなった仲宗根政善(引率教員として動員されたが、生徒とともに投降)が著した『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』の記述に忠実な内容になっている。また「自分自身、ぜんぜん戦争を知らない世代」なので「前の作品には、まったくとらわれないでいこうと」取り組んだ脚本担当の加藤伸代は、主人公を一人に絞こまず「女学生と教師の集団を主人公」にする集団劇にすること、そして生徒たちを戦場に連れて行ってしまったという「先生の深い悔恨、深い悲しみ」を出すことを意識したと語っている<sup>10)</sup>。制作側のこうした意図は、教師と生徒の投降シーンに加え、戦後、病院に収容されていた生徒を教師が見舞うエンディングからも明らかで、このことが、時間的にはわずかではあるが「生き延びた人」の姿をも描いたこの作品の最大の特徴となっている。沖縄なまりのイントネーションで話す生徒たちや、沖縄語を話す住民が登場する点も、それまでの作品では見られなかった傾向である。

以上3作品の特徴を一言で表すならば、1953年版は「悲劇的」、68年版は「愛国的」、95年版は「人間的」となるだろうか。特に「いかに生き延びたのか」という視点が加わる95年版に比べ、53年版と68年版では、ひめゆり学徒が「いかに死んだのか」に焦点が置かれていたことが分かる。しかし死を強調する「ひめゆり」の表象には、尾鍋(2009)が指摘するとおり、「無垢なるひめゆり」という「美化」が常につきまといっていた<sup>11)</sup>。

若者にとって死が遠くなったといわれる今日、戦争がもたらす死の現実の一端に触れられる機会はやはり確保しておくべきであろう。一方私たちは、死の側面に注目する物語の弊害を、53年版と68年版の作品から学ぶことができる。すなわち「死」の強調は、戦争の記憶を悲劇的なもの、あるいは愛国的なものとして消費したいという誘惑を引き寄せやすいのである。前者は従来平和教育でも見られた傾向であることは先述したとおりである。後者は、死と国家を結びつけるナショナリズムの問題に通じるテーマであり、死や滅びに「美」を見出すことを好む人々の欲望にも親和的である。このようなイメージの消費の弊害については、先出の尾鍋も言及している戸邊(2002)の指摘が示唆に富む。戸邊は日本の「ひめゆり」像について「保守の側が英霊に祀りあげ女性の健気な忠誠の像を打ち出せば、革新はそ

の同じ女性像を無垢な犠牲の象徴として描き出し平和活動の資源とした<sup>12)</sup>と指摘した。そもそも他者の死を消費したいという欲望を持ち続ける限り、たとえ体験者の証言を直接聴く機会があったとしても、「いかに死んだか」が選択的に聞き取られるだけで「いかに生き延びてきたのか」が聞き取られることはない。死が遠く、生者と死者の関係性が見えにくい現代であればなおさら、死者は生者の都合で美化され、利用され、消費される。またそのようにして聞き取られたプライベートな語りは、語り手の思いとは裏腹に、ナショナルな記憶に回収される危険性をも孕む。そして何より問題なのは、「ひめゆり」の物語が広がれば広がるほど、厳しい環境を生き延びてきた元学徒たちの思いはますます置き去りにされていったことである。

実際、ひめゆり学徒の生存者たちの多くは、戦後も固く口を閉ざしてきた。しかし「ひめゆり」の名がひとり歩きすることで「戦争の悲惨さだけが強調され、すべてが美化されてしまうこと」を恐れた元学徒の中から自らの経験を語る者が現れ始めたのは1980年代に入ってからのことである。自分だけ生き残って申し訳ない、軍国少女だった当時の自分に対する「悔やんでも悔やみ切れない腹立たしさが、<sup>かたり</sup>語部である自分を支えている気がする」といった元学徒たちの思いは、その後1989年のひめゆり平和祈念資料館の開館と、元学徒の証言のみで構成されたドキュメンタリー映画「ひめゆり」の制作へとつながった(後藤, 1995; 柴田, 2007)。資料館の説明員も務める尾鍋によれば、資料館の展示は、ひめゆり学徒隊という沖縄戦の一つの悲劇が生まれた背景として、当時の「教育」に問題があったことを明示する構成になっている。こうした元学徒の思いや願いが、資料館の開館後に制作された95年の映画において、教師の悔恨というかたちで初めて反映された事実を私たちは重く受け止めなければならないだろう。

## 2.2. 「生」の記憶に注目することの功罪

### ——「それでも生き延びてきた」生を聴く

ところで95年版には「生」の記憶も描かれていた。では「生」の記憶を強調すれば、戦争の記憶の継承は促進するのだろうか。確かに生は今日的なできごとで、死は過去のできごとであるから、生を強調することで過去と現在の時間的な乖離を埋めれば、過去のできごとに対してもリアリティや親近感を持て

る可能性は高くなるかもしれない。戦争の話は「暗くて気が重い」とか「退屈だ」と言う学習者の反応を受けて、「悲惨な話の中にも生きる希望を」といった、ポジティブで力強い生を感じさせる語りを求める傾向も強くなってきたように感じられる。

しかし、体験者の「生」の記憶に学習者の日々の生活実感を重ねることで体験者への共感を喚起させるやり方には、とすると、学習者がこれまでの自身の経験の枠内に体験者の記憶を矮小化し、理解ないし消費してしまうという別の懸念が生じる。このとき学習者は、自身が縛られている認識の枠組みを省察することもなければ、それを越え出る何ものかが存在し得ることに思いを馳せることもない。そのため学習者の想像を絶するような体験者の記憶は聞き取られることなく霧散してしまう。死の恐怖を連想させるものを遠ざける動きが、薄れゆく過去の戦争のリアルを後世に伝える機会を阻んでしまう可能性も否定できない<sup>13)</sup>。さらに生の力強さを強調することは、一方で生き残ったという事実を個人の能力や資質の問題に還元し、過剰に美化してしまう懸念を生じさせる。その結果、戦争体験者を生き延びた存在足らしめている多くの死者たちはなぜ死ななければならなかったのか、という問いが追及されないまま、記憶の継承が進んでしまうかもしれないのである。例えば戦争の加害責任や、それを下支えした当時の社会規範や権力構造の問題はその典型であろう。アジア諸国に対する日本の加害責任を問う声は1970年代前後から強調され始めたといわれるが<sup>14)</sup>、その応答は未だ十分であるとはいえない。まして沖縄に対する加害責任は、その気づきの契機を今井や神山が映画の中に滑り込ませていたにもかかわらず、全くと言っていいほど話題になってこなかった。

戦後、亡くなった学徒たちへの追悼の日々を生きた仲宗根政善の手記には、以下の記述が見られる。これらの文言からも、生存者が生き残った理由を個人の能力や資質の問題にすりかえてしまうことが当事者たちの意に反する行為であることが読み取れる(仲宗根, 1951=1982; 428-429)。

生き残った者は殊勝であったとか、死んだ者は勇敢であったとか、臆病であったとか、〔中略〕いったいそういうことが今次沖縄戦においてどれほど生死と関係があったろうか。人間の個々の力はこの戦いの前にはほとんどゼロに近かつ

た。〔中略〕生きるも死ぬも、ただ偶然であり、僥倖であった。生き残った生徒と死んだ生徒を比較して、人間のあさはかな知恵で生死の理由を判断することはとうてい不可能である。

こうして生きのびた生命の底には、悲しみが深淵のようにたたえられている。〔中略〕太陽のもとで現実には芽を出して生きている自分の生命は、永遠に去ってしまった生徒たちの死と、そのままにつながっている。

今日、戦争の記憶の継承を考えるにあたり、戦争体験の「生」の側面に注目することは時代の趨勢を考えても妥当な動きであろう。しかし生の明るく力強い側面に焦点を当てるだけではおそらく片手落ちなのだ。そうではない「生」、例えば死者や他者、環境とのつながりの中で生きられた生や、強大な力の前ではほとんど無力なものとなってしまうような不安定な生、悲しみとともに生き延びてきた脆く傷つきやすい生が存在する。戦争の記憶を継承する学びには、そうした「生のあやうさ」にも触れることが求められているのではないだろうか。

### 3. 「生」の被傷性に触れる

#### 3.1. J. バトラーの「生のあやうさ」

「生のあやうさ」(The Precariousness of Life)とは、ジュディス・バトラーが2004年に発表した“*Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*” (邦題『生のあやうさ 哀悼と暴力の政治学』；以下PL)と、2009年に発表した“*Frames of War: When Is Life Grievable?*” (邦題『戦争の枠組 生はいつ嘆きうるものであるか』；以下FW)の2冊において中心的な位置を占める概念である<sup>15)</sup>。

バトラーの「生のあやうさ」は、レヴィナスの「顔」の概念を下敷きにしている。「他者」とは「汝殺すなかれ」と私に呼びかける、赤裸裸で無防備に晒された「顔」であり、私はその「顔」、すなわち他者の傷つきやすさ(vulnerability)に対して応答=責任(responsibility)があるとするレヴィナスの思想を踏まえ、バトラーは次のように説明する。

私たち自身が傷つきうる存在であること、他者も傷つきうること、われわれは誰かの意思のま

まに死にさらされる存在であること、そうしたことのすべてが恐怖と悲しみの原因となる。〔中略〕誰か見知らぬ他者に私たちの生が根本的に依存していること、この条件は自分の意思で簡単に葬り去ることなどできない。(PL: 4-5, 以下頁番号は訳書の頁数)

生のあやうさが意味するのは、社会的に生きるということ、つまり、ある人の生は常にある意味で他者の手に委ねられているということである。わたしたちの生が、わたしたちの知っている人、そして知らない人にも、さらされているということであり、わたしたちの知っている、ほとんど知らない、あるいはまったく知らない人々に依存しているということなのだ。それは同時にまたその逆に、わたしたちの生が、わたしたちにさらされ、依存している他者、その多くが名前を持たない他者の影響を受ける、ということでもある。これらの関係は必ずしも愛の関係でもなく、配慮の関係ですらないが、他者への義務を構成するものである。(FW: 24-25)

私の身体は、そもそも他者に晒され、常にその影響を受けながら存在しており、他者もまた同様であるという意味において、人間の生はあやうく、傷つきやすいものである。私と他者は、この傷つきやすさ、ないしは被傷性を介してつねにすでにつながっている。したがって他者の「生のあやうさ」を感受することは、存在論的なレベルでは他者を感受すること。私の傷つきやすさに気づくことであり、認識のレベルではいわゆる「共感共苦」(compassion)として経験されることになる。この被傷性は、まず私と他者があって、その間に事後的に生じるものではなく、『私』の形成に先立つ(PL: 67)。なぜなら「私」とは、すでに他者に差し出され、自分のものではない生に巻き込まれる存在であって、私自身も完全に分かっているわけではないからである。その意味で、被傷性が私と他者の存在の相互依存性を成り立たせているとも言える。この関係性は「自分の意思で簡単に葬り去ることなどできない」(PL: 4)し、それが「他者への義務を構成」(FW: 25)する、すなわち応答責任が生じるとバトラーが主張するのもそのためである。バトラーは、私たちの身体をそのようなものとして捉え直すことを提案した後、それ

ゆえ私たちの身体が生き延びるためには、個々の生のあり方よりも「生のあやうさ」の格差の形成に影響を及ぼす社会的な条件や制度が問題になると指摘する。「生のあやうさ」は私たちの共通の条件なのだから、本来ならば平等に配分されなければならないからである。さらにバトラーの主張で興味深いのは、私たちの生のあやうさの不均衡に気づくことが私たちの身体のある方を再考する契機となり、かつアイデンティティーの政治を越える新たな連帯の契機となると考えている点である。

問題は、特定の存在が生あるものなのかどうかでも、その存在が「人格」の地位をもつかどうかでもない。問題は、生きつづけ栄えるための社会的条件が可能であるのか、そうでないか、なのだ。そのような問題設定をしてはじめて、わたしたちは、これらの議論を脱線させてきた人間中心主義的でリベラルな個人主義的な思い込みを避けることができるのである。(FW: 31)

フレカリティ  
不安定性が格差をともなって割り当てられているということこそが、身体フレカリティの存在論の再考と、進歩的あるいは左翼的な政治との双方にとって、出発点となるのだ。アイデンティティーのフレカリティカテゴリーを乗り越え、横断しつづけていうようなかたちで。(FW: 12)

現実の社会では、「生のあやうさ」は不平等に配分されている。ある特定の人々の生が極端に不安定な状態に置かれ、場合によっては、生の枠組みの外に置かれていたりさえする。その最たる例が戦争である。バトラーは、誰からも気づかれることがなかった他者に対してふるわれる暴力が戦争であると考えている。だから私たちは、身近な他者を失ったときには嘆き悲しむのに、戦争によって生を奪われた、自分たちの知らない遠い他者の死を嘆かずにいられるのだ。

戦争とは、その生の喪失を嘆きうる集団とその喪失が悲嘆をもたらさない集団とを分けることだ、と考えても良いかもしれない。悲嘆をもたらさない生は、そもそも生きていなかったために、つまり、かつて生とみなされたことがなかったために、悼まれることのできない生なのだ。

(FW: 54)

そこでバトラーの関心は、生の喪失を嘆きうる他者とそうでない他者に分類する「枠組」とはいかなるものか、という問いに向かう。この問いを単純に考えるならば、他者の被傷性を感知できればその他者は生あるものに分類されるので、私は暴力をふるわずに済むし、その生のあやうさを規定する権力なり規範なりに基づく枠組の存在にも気づくことができる、ということになる。またはその枠組自体をなくしてしまえばいい、ということになる。しかし話はそう単純ではない。ここでバトラーは再び「顔」の概念に立ち戻る。他者の無防備な「顔」は生のあやうさを訴えるが、その「顔」の傷つきやすさが私に殺人の暴力を欲望させ、一方で殺害の禁止という倫理的な要請を行うというレヴィナスの思想に、である。例えば私たちは、少なくとも部分的にはジェンダーや社会的なカテゴリーを賦与されることによって理解可能で承認可能な存在となる。つまり人は「暴力を通じてかたづけられる」(FW: 202)。しかし、私たちは暴力によって主体化される存在だからこそ、暴力への葛藤や倫理的責任が生じるのであって、そこに非暴力の可能性が生まれる、とバトラーは考える。あるいは、私や私に近い人を傷つける、またはその可能性があると思なされた他者に対して恐怖や憤怒の念を抱くとき、その他者の存在を無化したくなる衝動を思いとどめる場合を想像してもよい。重要なことは、暴力の可能性は、社会的条件や制度といった私の外部にあるだけではなく、その他者との根源的な相互依存関係ゆえに私の内部にもあることを認めなければならない、ということである。他者を分類する枠組の形成に、私たちは決して無関係ではないのである。

非暴力はまさしく美德でもなければ立場でもなく、ましてや普遍的に適用されるべき一連の原則でもない。それは、傷つき、怒りくるい、暴力的な報復にむかいやすく、にもかかわらずそのような行動をするまいと葛藤する（そしてしばしばみずからに対する憤怒をつくりだす）ような、暴力にまみれ葛藤をかかえた主体の位置を示しているのだ。暴力に反対するたたかいは、暴力が自分自身の可能性だということを受け入れられる。それを受け入れず、美しい魂を装い、定

義上暴力的な攻撃性を持たないものを装うとすると、倫理的難局も葛藤も問題もありえないことになる。このような美德という立場や純粹さの原則は、そのような立場をつくりだすもとにある暴力を否認し抑圧するだろう。(FW: 207)

ここまでのバトラーの主張をまとめよう。私は、他者との共生に向けて、他者や自分の傷つきやすさに敏感になること、私たちの「生のあやうさ」の軽重を決定する社会規範や権力構造に敏感になることが求められている。また非暴力の実践とは、そのような他者の被傷性に直面したときの、私自身の「攻撃を押さえ込もうとする恐怖と不安」が「殺人的行為にいたらないように抑えておく闘い」(PL: 13)を自覚することから始まる。そしてこれらはすべて、私の知らない人々を含めた他者たちと私の存在が、被傷性を介して根源的に相互依存の関係にあるという思想に支えられている。

### 3.2. 「生の軌跡／奇跡」を聴く平和教育の可能性

バトラーの「生のあやうさ」の概念を踏まえ、「いかに生き延びたのか」に注目する戦争の記憶の継承可能性、または平和教育のあり方について再考する。

体験者の「生き延びてきた」記憶には、人の生が関係性によって支えられてきたことを実感させるエピソードとともに、いくつもの切実な危機や選択に晒される場面が登場する。学習者は、それが体験者にとってどのような危機だったのか、その危機はなぜもたらされたのか、そこでどんな選択がどんな理由でなされたのか、といったことを考えながらに耳を傾けることができる。その上で「もし自分だったら？」というかたちで追体験をすることで、他者や自分の生の傷つきやすさに触れつつ、そのような不条理の中でも生き延びてきた体験者の底力に触れることもできるだろう。さらにその中で育まれる「共感共苦」の経験の積み重ねが、たとえ他者の傷つきやすさに出会っても、その生を無化するような暴力の発動を自制し、その他者を生あるものとして承認する態度形成や、私は他者なしにはあり得ない関係性の中に生きる人間であることへの気づきにつながると考えられる。換言すれば、「生き延びてきた」記憶を聴くことは「生の軌跡／奇跡」を聴くことなのである。一方、生のあやうさに注目することは、そ

のあやうさゆえに生きることが叶わなかった多くの死者たちの存在を浮き彫りにする。なぜ彼らは「悲嘆をもたらさない生」とみなされたのか、その死はどのように弔われ、残された人々に何を残したのかなど、こちらさまざまな方面に思いを馳せることができるだろう。つまり「生の軌跡／奇跡」を聴くことは、そのことと背中合わせにある「死」の意味を問うことでもあるのだ。したがって体験者の「生」の側面に注目する戦争の記憶の継承は、「死」の側面を無視することでは決してないことを強調しておかねばならない。しかし悲惨な死のみを選択的に聞きとるような平和教育に、このような学びを期待することは難しい。

「生のあやうさ」という人間存在の根源的条件から学びを構築することはまた、平和教育の時間的・地理的乖離の問題を解消する方向に作用することが期待される。生のあやうさの不均衡を是正すべく、戦争への異議申し立ても含め、具体的な行動を起こす学習者が現れれば、それが平和の創造を目的とする平和教育の具体的な実践にもつながっていくだろう。

## 4. むすびにかえて

本稿では「生のあやうさ」に焦点化する戦争の記憶の継承可能性と平和教育への効果について検討を試みた。これまで私たちは、戦争体験の語りから死を中心に聞き取ってきた。しかしその死は悲惨なものとして、または愛国的なものとして消費され、戦争のリアリティを遠ざけるものとして機能する傾向が強かった。そこで「死」だけではなく「生」、それも「生のあやうさ」に目を向けることにより、それでも生き延びてきた人々の「生の軌跡／奇跡」を聴き取ること、そして人間存在の被傷性を感じることが、戦争のリアリティ、ひいては社会的不平等に抗する平和教育の醸成につながる可能性を提示した。

今後の検討課題は、具体的な平和教育実践の中で、本稿の問題提起をどこまで反映させることができるか、ということである。ただし冒頭でその発言を取り上げた山口の授業実践を見る限り、見通しは悪くなさそうだ。実践の詳細は山口(2013)に譲るが、「沖縄戦の何を語り継いでいるのか」との問いに対する山口の次の応答からもそのことを伺い知ることが



できよう。

最近はやっぱり生き様というか、その人の葛藤そのものとか、という感じかな。〔中略〕平和教育の議論で言うと、より当事者性を持ってコンパッションできるために、起こった事実だけではなくて、選択そのものだったり、葛藤そのものをやっぱりきちっと伝えたいというか。それが、ひとりひとりがそういう葛藤を負いながら、悩みながら人生を歩んできて、それが不幸にも一方的に絶たれたりとか一方的に壊されたりとかっていうことの不条理さみたいなものにちゃんとつながればいいなと思っています<sup>16)</sup>。

山口が語り継ごうとする沖縄戦の記憶は、悲惨な、あるいは美化された死の記憶ではなく、ポジティブな生の記憶でもなく、葛藤を背負った戦争体験者の「生き延びてきた」記憶であり、傷つきやすい生の記憶である。それが、私たちの被傷性に根拠づけられた当事者性の獲得を経由して、戦争のリアリティへの想像力を育む平和教育につながっていく。おそらくそうした実践の積み重ねは、教え込み型の平和教育と、停止ないし遮断状態となっている学習者の思考をゆるやかに解きほぐす方向にも寄与していくことだろう。

## 引用文献

- Butler, J. *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*, Verso, 2004. (ジュディス・バトラー (著) 本橋哲也 (訳) 『生のあやうさ 哀悼と暴力の政治学』以文社, 2007年)
- Butler, J. *Frames of War: When Is Life Grievable?*, Verso, 2009. (ジュディス・バトラー (著) 清水晶子 (訳) 『戦争の枠組 生はいつ嘆きうるものであるか』筑摩書房, 2012年)
- 尾鍋拓美『『ひめゆり』はどのように表象されてきたか—創成期の『ひめゆり』表象を中心に』『沖縄文化』42(2), 2009年, 61-70頁
- 後藤淑子『『ひめゆりの乙女』たちの“反戦”』『潮』1995年9月号, 282-291頁
- 柴田昌平「撮影報告『ひめゆり』」『映画撮影』No.174, 2007年, 26-29頁
- 竹内久顕(編)『平和教育を問い直す 次世代への批判的継

承』法律文化社, 2011年

- 戸邊秀明「沖縄」成田龍一・吉見俊哉(編)『20世紀日本の思想』作品社, 2002年, 102-105頁
- 仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川文庫, 1982年〔初版:1951年〕
- 仲程昌徳『『ひめゆり』の読まれ方—映画『ひめゆりの塔』四本をめぐる—』日本東洋文化論集:琉球大学法文学部紀要(9), 2003年, 1-14頁
- 福岡良明『『反戦』の語りと読みのメディア史—手記から映画へ:『ひめゆりの塔』を事例にして』マス・コミュニケーション研究(67), 2005年, 67-83頁
- 山口剛史「沖縄戦を中心とした平和教育教材開発研究報告書」2009年~2012年科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書, 2013年, 2-34頁

## 注

- 1) BSIスペシャル「戦争を継ぐ〜山田洋次・84歳の挑戦〜」(NHK・2015年11月15日)。
- 2) 琉球大学の学生への2015年2月21日のインタビューより。
- 3) 竹内は、2004年の新聞記事として「平和教育は『戦争は悪い』というだけで『なぜ悪いか』を考えさせてくれる先生は、ほとんどいなかった」とする19歳の投書を紹介している。また2005年には、高校入試での出題文中に「元ひめゆり学徒の証言は退屈で飽きた」との文言があったことが物議を醸した。この一連の経緯は、ひめゆり平和祈念資料館『青山学院高等部入試問題に関する特集』財団法人女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館, 2006年に詳しい。
- 4) 竹内、前掲書, 7-14頁。なお竹内は、平和教育をする側の乖離である「これまでの平和教育と新しい平和教育との乖離」を加えた「4つの乖離」を提起している。
- 5) 1997年に琉球大学で発足した学生団体。沖縄では、戦跡や基地を案内する「平和ガイド」が1990年代以降増加し、沖縄修学旅行での平和学習に大きく貢献したが、彼らも学生ガイドとして一端を担ってきた。その経緯と詳細は、琉球大学教育学部『琉球大学学生と埼玉県立浦和第一女子高校との修学旅行平和学習を中心とした交流事業:2000年度文部省フレンドシップ事業報告書(研究代表者 高嶋伸欣)』、2001年、及び吉田直子『語り継ぎ』の教育的効果—若者は沖縄戦の語り継ぎを通して何を学ぶのか』『聖心女子大学大学院論集』34(2), 2012年, 85-106頁を参照のこと。

- 6) 2013年2月5日に実施した本人へのインタビューより。
- 7) 記憶の継承と教育学との関係に関する先行研究としては、Simon, R.I. *The Touch of the Past: Remembrance, Learning, and Ethics*, Palgrave Macmillan, 2005がある。ここでは、記憶の継承が根源的に教育的な企てであることが事例を交えて述べられている。
- 8) しかし現実はより悲惨であった。手術で切り取られた兵士の手足を外に運び出すのは学徒の役目であったし、爆撃で吹き飛んだ手足や首、胴体などが木にひっかかって揺れていたというのは、住民の証言でもしばしば耳にする沖縄戦の典型的な描写である。
- 9) シナリオ「あゝひめゆりの塔」『キネマ旬報』1968年10月号 (No.479)、131頁。
- 10) 『ひめゆりの塔』脚本家インタビュー いま、なぜ『ひめゆりの塔』か』『シナリオ』1995年6月号 (第51巻6号)、11-12頁。
- 11) ひめゆり学徒の物語が広く受容された理由のひとつにジェンダーの問題があることも見逃せない。例えば「鉄血勤皇隊」として動員された男子学徒を描いた映画「沖縄健児隊」は、1作目の「ひめゆりの塔」と同年に公開された。しかし観客動員600万人、当時の邦画・洋画を合わせた最高配収を塗り替える1億8000万円の興行収入を記録するなど(福岡, 2005: 70)、空前の大ヒットとなった「ひめゆりの塔」に比べ、「沖縄健児隊」は全く話題に上らなかった。
- 12) ひめゆり学徒隊の犠牲者は靖国神社に祀られている。
- 13) 近年では広島平和記念資料館で展示されてきた「被爆再現人形」が、資料館のリニューアル後に撤去されることが話題となった。もともと資料館側は、火傷で垂れ下がった皮膚をまとったこのシオラマ人形に対して「原爆被害の凄惨な情景はこんなものではなかった。もっと悲惨だった」という体験者からの意見もあったことを明らかにした上で、「被爆の実相を事実として正確に伝えていく」ための撤去であることを強調しており、今後の展開が待たれる。(広島市「平和記念資料館の被爆再現人形の撤去について」<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/1371543633862/index.html>, 2016年3月21日閲覧)
- 14) 朝日新聞朝刊「歴史と向き合う 被害と加害意識の変遷 小熊英二さんに聞く」(2007年2月27日)より。『週刊朝日』1971年8月25日増刊号でも「日中戦争 加害者としての日本人」と題された記事が掲載されている。
- 15) Online版Merriam-Webster Dictionary (<http://www.merriam-webster.com>)によれば、precariousの意味は(1) depending on the will or pleasure of another, (2) dependent on uncertain premises, (3)(a) dependent on chance circumstances, unknown conditions, or uncertain developments, (b) characterized by a lack of security or stability that threatens with dangerとある。すなわち外的なはたらきかけに依存する受動的で不安定な状態を表す語として定義されている。
- 16) 注6参照。